

君主政体の理想と「簡潔さ」の称揚

——十六世紀後半のレトリックにおける短文集成の位置づけ——

山 本 佳 生

はじめに

エラスムスは『キケロ主義者』において、キケロ模倣に固執する人々を笑い、その不適切さを批判した。時や場所などの外的状況、そして各人にそなわる本性が異なるというのに、どうして忠実な再現などできるだろうか。このようなエラスムスの見方は、のちの世代にとって活動や思索の出発点となるだろう。時も、場所も、言語も異なるのであれば、それを再現するのではなく、参考にしながら、自分たちにとって「適正」なものを追求すればよいのだ⁽¹⁾。

他方で、「ローマはもはやかつてのローマではない。そこには廢墟や瓦礫、いにしへの災いの傷跡や痕跡以外なにもない⁽²⁾」というエラスムスの認識は、イタリアルネサンスの牽引役であり、教皇庁を擁するローマの威光を弱め、その支配的な影響力の拒否へと人々を向かわせる。とはいえ、それはすぐに起こるわけではない。度重なる宗教戦争によって国内の統一もままならないフランスが、実際に王権の強化とイタリアの影響からの脱却を目指し始めるのは、1580年代からである。それゆえ我々は、この年代からの政治的变化を追うとともに、レトリックがそれとどのような関係を結ぶのかについても考察を加える。そしてその過程において文体上の価値である「簡潔さ *brevitas*」に注目し、最終的に、当時隆盛を誇った引用句の集成、コモンブレイスブックが1528年に発するこうした一連の問題意識の延長線上にあり、なおかつそれとともに衰退していくことを示したい。

(1) Cf. J. Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, Paris, Les Belles Lettres, 1981, t. 2, pp. 836-837では「(自然な仕方)で」似る *exprimere* と「(努力によって) 似せようとする *imitari*」の違いが強調されている。また E. V. Telle はエラスムスの特徴として « *sequi*, non *adsequi*, *mirari*, non *imitari* » があることを示す (*L'Erasmianus sive Ciceronianus d'E. Dolet (1535). Introduction – Fac-similé de l'éd. originale du de Imitatione Ciceroniana – Commentaires et appendices*, Genève, Droz, 1979, p. 378)

(2) « *Dialogus Ciceronianus* », éd. P. Mesnard, in ASD, I-2, p. 694, « *Roma Roma non est, nihil habens præter ruinas ruderaque priscae calamitatis cicatris ac vestigia.* »

1. 君主政の理想

タキトゥスの影響

サピエンツァで行われたミュレの一連の演説にせよ、モンテーニュの『エッセー』にせよ、共通していたのは、雄弁がもはや時代にそぐわないものだという認識であった。ミュレは雄弁の代わりに書簡が次の時代に必要となると言い、他方のモンテーニュは「余暇 *otium*」の産物としてみずからの著作を世にあらわした。これにくわえて、もう一つ共通していることがある。それはローマ共和政のような複数の支配者が乱立する政治体制に見切りをつけ、君主政をそれに代わるものとして描き出していることだ。ミュレは次のように述べる。

したがってまずに目にするにちがいないことは、今日、共和政体の数は少なくなり、一人の命令や意志に影響を受けず、一人の人間に服従せず、支配されない人間などいないということだ (*respublicas hodie perquam paucas esse : nullam esse propemodum gentem, quæ non ab unius nutu atque arbitrio pendeat, uni pareat, ab uno regatur.*)。それゆえ、少なくともこの点から、我々の時代状況というのは、何人かの人々によって支配されていたときよりも、一人の君主によって支配されていた時代に似ているといえるだろう⁽³⁾。

また、モンテーニュも雄弁の墮落と内乱による政治の腐敗を結び付け、まさしくそれが同時代の政治状況にもあらわれているという認識を示すとともに、その解決策として君主政を呈示する。

雄弁がローマで最も栄えたのは、ローマの政情が最もひどく乱れ、内乱の嵐に揺さぶられていたときであった。ちょうど放置し、手入れのしていない畑に最も勢いのある雑草がはびこるようなものだ。だから、たった一人の君主に隷属する国家は、他の国家よりも雄弁を必要としないようだ。というのも、民衆は愚昧と軽信の虜となって、雄弁の調子のよい甘言に自由自在に引き回されやすく、物事の真実を理性の力で計り、認識しようとしなくなるが、そういう軽信はただ一人の君主のなかには容易には生じないからである。また、一人であればよい教育と忠告によって雄弁の害悪から守ることも容易である⁽⁴⁾。

(3) *Opera Omnia*, éd. C.-H. Frotscher, Leipzig, 1848, t. 1, Genève, Slatkine Reprints, 1971. “Oratio XIV”, p. 384. またミュレが時代に合わせたレトリックを模索していることについては M. Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, Genève, Droz, 2009 (3^e éd.) [1^{ère} éd., 1980], pp. 170-175.

(4) *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, Paris, Gallimard, 2007, I, 51, 325-326.

この文章は非常に示唆的である。とりわけ最後にモンテーニュが述べる君主教育は、当時の人文主義者たちにとって大きな課題であった。いかに君主そして国家を導くかが問題であり、そのために必要なレトリックが宮廷や高等法院において構想された。これについては後述することになるが、その前にもう一度モンテーニュの文章に目を向ければ、実はこの国家の混乱と雄弁の関係性は、Fumaroli がすでに指摘しているように⁽⁵⁾、タキトゥス『弁論家の対話』に基づいた記述である⁽⁶⁾。そしてこのタキトゥスこそが、君主政の強化と雄弁の衰退のなかで、キケロという絶対的な模範に代わって参照されるべき作家として、十六世紀の最後にかけて、その存在感を増すのである⁽⁷⁾。その価値を見抜いていたのがミュレであり、その弟子であるユストゥス・リプシウスにはほかならない⁽⁸⁾。

1574年にタキトゥス『年代記』の優れた校訂版を世にあらわしたこの文献学者は、その作業のなかで培った知識と政治に対する見方を1589年の『政治学六巻』のなかで展開する。「引用の織物」として接続語以外は他の著作からの引用で成り立っているこの作品は、君主政の擁護とその扱い方が述べられた論考として読むことができる⁽⁹⁾。タキトゥスを多く引用しながら、リプシウスが主張するのは、より強い権力を持った君主によって国家の混乱状態を解決し、恒常的な平

(5) Marc Fumaroli, « Les *Essais* de Montaigne : l'éloquence du for intérieur », dans *La Diplomatie de l'esprit*, Paris, Gallimard, 1998, ch. 4, pp. 128-129. また、モンテーニュとタキトゥスの関係については、P. Villey, *Les sources et l'évolution des *Essais* de Montaigne*, Paris, Hachette, 1908, t. 1, pp. 224-227 ; G. Mathieu-Castellani, « L'intertexte rhétorique : Tacite, Quintilien et la poétique dans les *Essais* », in *Montaigne et la rhétorique*, (éd.) O'Brien, Actes du colloque de St. Andrews, 28-31 mars 1992, Paris, Honoré Champion, 1995, pp. 17-26, en part., pp. 20-23.

(6) Cf. Tacite, *Dialogue des orateurs*, texte établi par H. Goelzer et traduit par H. Bornecque, Paris, Les Belles Lettres, 2010, XL, pp. 70-71.

(7) この『弁論家の対話』とキケロのレトリックと哲学を比較しつつ考察したのが、A. Michel, *Le "Dialogue des Orateurs" de Tacite et la philosophie de Cicéron*, Paris, Librairie C. Klincksieck, 1962.

(8) リプシウスとタキトゥスについての研究は主として次の三つ。J. Ruyschaert, *Juste Lipse et les Annales de Tacite. Une méthode de critique textuelle au XVI^e siècle*, Louvain, Bibliothèque de l'Université, 1949 ; C. O. Brink, « Justus Lipsius and the text of Tacitus », in *The Journal of Roman Studies*, vol. 41, Issue 1-2, November 1951, pp. 32-51 ; P. Laurens, « Le *Dialogue des orateurs* de Juste Lipse », in *Juste Lipse (1547-1606) en son temps*, (éd.) C. Mouchel, Paris, Champion, 1996, pp. 101-115.

(9) 『政治学』とリプシウスの政治思想については次。J. Waszink, « Instances of classical citations in the *Politica* of Justus Lipsius : their use and purposes », in *Humanistica Lovaniensia*, vol. 46, 1997, pp. 240-257 ; *Id.*, « *Inventio* in the *Politica* : Commonplace-Books and the Shape of Political Theory », in *Lipsius in Leiden : Studies in the Life and Works of a Great Humanist on the Occasion of his 450th Anniversary*, eds. K. A. E. Enenkel and Chris L. Heesakkers, Florivallis, 1997, pp. 141-162 ; *Id.*, « *Virtuous deception* : the *Politica* and the Wars in the Low Countries and France, 1559-1589 », in *Iustus Lipsius, europae lumen et columnen : Proceedings of the International Colloquium Leuven 17-19 September 1997*, (eds.) G. Tournoy, J. De Landtsheer and J. Papy, Leuven University Press, 1999, pp. 248-268 ; Jean Jehasse, *La Renaissance de la critique : l'essor de l'Humanisme érudit de 1560 à 1614*, Saint-Étienne, Publication de l'Université de Saint-Étienne, 1976, pp. 276-294 ; *Id.*, « Juste Lipse et le *Panegyrique de Trajan*. Un bilan de la pensée politique lipsienne », in *Juste Lipse (1547-1606) en son temps, op. cit.*, pp. 503-515.

和を構築することである。この見解はまさしくタキトゥスが描き出す帝政ローマの政治状況を参照することによって導出されたものである。リプシウスはすでに1584年の『恒心論』において、動乱のなかで賢者はどのように心の平静を保つかについて考察を行っていたが、この『政治学』はより具体的かつ実践的に、現状をどのように打破するかに焦点が当てられている。それゆえ、ここで論じられる第一のことは政治的安定のための方策であり、リプシウスは混乱を鎮め、臣民と国家の利益のためであれば、マキアベッリ的手段も容認する⁽¹⁰⁾。とはいえ、君主の有徳性についても忘れてはいない。君主は臣民の導き手として振る舞い、その信任によって国家が安定する。いわば君主の徳は国家安定のための道具であり、君主はそれを役割、あるいは公的なイメージとして担わなければならないのだ。

これにくわえてリプシウスが強調したのは、宗教を政治に従属させることの重要性である。つまり、国家と臣民の利益は宗教的信条よりも優先されるべきだと彼は考えている。これはもともとフランスの中道派「ポリティーク派」が主張していたことであるが（『政治学』というタイトルは暗に彼らのことを示している）リプシウスはこれを理論化し、自身のカトリックへの再帰属に際して広めたのだ。この観点から、カトリック極右の首領ギーズ公アンリとアンリ三世の暗殺後、王位継承者となったナヴァール王アンリがカトリックに改宗し、アンリ四世として戴冠したことは、ポリティーク派のイデオロギーに基づいたリプシウス政治思想の結実と見ることができる。

他にも、この政治の変化に意識的であった人物としてカルロ・パスカーリが挙げられる⁽¹¹⁾。このピエモンテ出身の人文主義者は、アンリ三世のもとで外交使節として、次いでアンリ四世のもとでは要職を兼任するなど、政治的手腕にすぐれていたが、1581年にはリプシウスの『政治学』に先駆けるようにタキトゥス『年代記』の注釈を出版するなど、文学的素養もそなえていた。1596年にルーアンで出版した『措辞の最高種について *De optimo genere elocutinis*』のなかで、パスカーリは、タキトゥスの『弁論家の対話』に多くを負いながら、文体は個人の選択ではなく、時代状況に左右されると定義づける。またローマの文学と政治が成熟したのは共和政下ではなく帝政下であり、キケロの雄弁が衰退し、代わりにセネカの哲学とタキトゥスの歴史がその位置を占めるようになる後一世紀の状況、つまり共和政が崩壊し、帝政へと移行したその時代を、この

(10) J. Lagrée, *Juste Lipse et la restauration du stoïcisme. Étude et traduction des traités stoïciens De la Constance, Manuel de philosophie stoïcienne, Physique des stoïciens (extraits)*, Paris, J. Vrin, 1994, pp. 93-94. Voir aussi, *Politica. Six Books of Politics or Political Instruction*, ed., transl. and Intro. J. Waszink, Bibliotheca Latinitatis Novæ, Assen, 2004, Introduction, pp. 98-102.

(11) この人物については次の二つ。M. Fumaroli, « La prose de l'État : Charles Paschal, théoricien du style royal. Rhétorique et politique à la Cour de France sous Henri III et Henri IV », dans *La Diplomatie de l'esprit, op. cit.*, ch. 3, pp. 59-124 ; Ch. Mouchel, *Cicéron et Sénèque dans la rhétorique de la Renaissance*, Marburg, Hitzeroth, 1990, pp. 145-158.

十六世紀後半のフランスの状況と並行関係で捉える。その観点から、この時代にふさわしいのは、帝政期の作家に見られるような簡潔な文体であると結論づける。しかし興味深いことに、パスカーリはキケロを共和政から帝政への移行にふさわしい媒介者としてみなしている。つまり、キケロのアッティカ風の引き締まった文体はローマの威厳を持ちながら、少ない言葉で多くを語り、君主と元老院に適している⁽¹²⁾。それゆえキケロは、アンリ四世による強権的な君主政へと移行しはじめるフランスの宮廷における模範となりうると主張するのだ。ところで、キケロを模範としながらも、イタリア人文主義のようにその猿真似に執心するのではなく、そこから政治状況に適したレトリックを創出することは、すでに十六世紀後半の宮廷、そして高等法院における課題であった。

宮廷のレトリック

アンリ三世治下、宮廷司祭ジャック・アミヨは国王のための「雄弁計画」を書き残した。これはイタリア人文主義の影響を色濃く受けたものであり、宮廷における雄弁が必要かつ有用であり、それをどのように形成するか、また王はどんな雄弁の素質をそなえるべきかについて論じられている⁽¹³⁾。他方、国王は1580年、アンリ・エチエンヌにフランスのキケロ主義者ピエール・ビュネルとクリストフ・ド・ロングイユの書簡の集成を出版するよう依頼している⁽¹⁴⁾。これらの事実が示すのは、宮廷人たちが、一方では宮廷にふさわしい洗練された文体をつくりあげて、他方ではイタリアの影響下から脱却し、自国語の威信を高めることを模索していたということだ。その際、廷臣たちにとって重要なのは、ときには美辞麗句やお世辞さえも使って君主をよろこばせるような、壮麗で耳当たりのよい言葉づかい、そして、昔からの大貴族によって構成される宮廷にふさわしい保守性と威厳を併せ持つレトリックである。このためにギリシャ、ラテンの作品をフランス語に翻訳することも推奨された。イタリアのキケロ主義から離れて、自分たちの黄金時代を作り出そうというナショナリズムに支えられたこの動きは絶対王政の完成まで続いた⁽¹⁵⁾。

(12) *De optimo genere elocutionis ad Petrum Forgetum Fresnæum, Regi ab interioribus consiliis, epistolis et jussis*, Raphaël du Petit-Val, Rouen, 1596, p. 40-41, « *illa brevisitas [...] Romana majestate digna [...] pauca loquens, multa docens [...] propria princeps et senatus.* »

(13) Jacques Amyot, *Projet d'éloquence royale composé pour Henri III, roi de France, d'après le manuscrit autographe de l'auteur*, Ph. O. Pierre, Versailles, 1805. 表題からもわかるとおり、これは当時は出版されることなく、草稿のまま残されたようだ。書かれたのはおそらく1576年から1578年のあいだだとされている。

(14) Henri Estienne, *Petri Bunelli, Galli, præceptoris, et Pauli Manutii, Itali, discipuli, epistolæ ciceroniano stylo scriptæ, aliorum Gallorum pariter et Italarum epistolæ eodem stylo scriptæ*, Genève, 1581. Cf. M. Fumaroli, « À l'origine d'un art français : la correspondance familière », dans *La Diplomatie de l'esprit*, op. cit., ch. 5, pp. 172-173.

高等法院のレトリック

こうした措辞を重視した華美な宮廷のレトリックに対し、高等法院では措辞の華麗さよりも博識に裏付けられた発想に重点が置かれた。高等法院の任務は演説弁論によって君主を称えることではなく、審議を行い、判決や勧告を発出することである。ときには王権を制限するための諫言を行なうなど、そのレトリックの重点は君主をよこばせること（*placere*）ではなく、教導くこと（*docere*）にあった。宮廷のレトリックでは翻訳を通じて自国語を豊かにすることが目指されるのとは反対に、高等法院では言論に威厳を与えるためギリシャ、ローマの古典からの直接的な引用が好まれた。この後者こそ Fumaroli が「引用のレトリック la rhétorique des citations」と呼ぶものにほかならない⁽¹⁶⁾。クリストフ・ド・トゥを嚆矢とするこのレトリックは⁽¹⁷⁾、古典著者やキリスト教作家たちからの引用を自分の弁論や言論に混ぜ込むことで、権威性と真実性を高めることを期待した。

高等法院のレトリックにもキケロの影響が多く見られる。キケロは学校で教えられ、大人になってからも読まれる著者であり、この時代の人々にとっては共通の教養といってよい。しかし次第に、司法官たちはキケロの文体を問題にするのではなく、キケロに文人の英雄という理想像を見るようになっていく。トガを着た弁論家は軍を動かす司令官と対をなし、国家を導いてゆく存在であるからだ。この理想像を彼らは過去の有名な司法官たちに重ね合わせ、その事績を回顧し、称賛した文章の集成を十六世紀末から次の世紀のはじめにかけて多く出版した。このように、キケロは彼らにとって思慮 *prudentia* や知恵 *sapientia* と結びついた雄弁の象徴であり、それにとまって審議弁論の価値が再び称揚された⁽¹⁸⁾。

このキケロ的雄弁の復権を本気で目指したのがデュ・ヴェール Guillaume Du Vair である⁽¹⁹⁾。

(15) イタリアのキケロ主義からの脱却とフランスナショナリズムの高揚に合わせたレトリックの伸張については M. Fumaroli, « Rhetoric, Politics, and Society : From Italian Ciceronianism to French Classicism », in *Renaissance Rhetoric : Studies in the Theory and Practice of Renaissance Rhetoric*, ed. James J. Murphy, University of California Press, 1983, pp. 253-273 ; *id.*, *L'âge de l'éloquence, op. cit.*, pp. 492-498 ; Ch. Mouchel, « Théodore Marcile et le cicéronianisme à l'Université de Paris sous le règne de Henri III », in *Nouvelle Revue du XVI^e siècle*, vol. 8, 1990, pp. 51-62.

(16) Fumaroli, *L'âge de l'éloquence, op. cit.*, pp. 464-466 ; 489-492 ; 685-688.

(17) Sylvie Daubresse, « Un discours de Christophe de Thou, premier président du Parlement de Paris (11 mai 1565) », in *La Justice royale et le Parlement de Paris (XVI^e et XVII^e siècle)*, études réunies par Yves-Marie Bercé et Alfred Soman, Paris, H. Champion, Genève, Droz, 1995, pp. 373-390. また次も参照。M. Houlemare : *Politiques de la parole. Le Parlement de Paris au XVI^e siècle*, Genève, Droz, 2011, surtout ch. VII, "Des orateurs dans la seconde moitié du XVI^e siècle", pp. 259-324. ミシェル・ド・ロピタルにおいてもこの種のレトリックが見られる。L. Petris, *La plume et la tribune. Michel de L'Hospital et ses discours (1559-1562)*, suivi de l'édition du *De initiation Sermo* (1559) et des *Discours de Michel de L'Hospital* (1560-1562), Genève, Droz, 2002, ch. iv, pp. 217-274.

(18) J. M. Chatelain, « Heros togatus : culture cicéronienne et gloire de la robe dans la France d'Henri IV », in *Journal des savants*, juill.-déc., 1991, pp. 263-287.

彼はまず同僚の司法官たちが「引用のレトリック」として古典からの引用文の集成に過度に依存していることを批判する。たしかにそうした学識を蓄えておくことは重要であり、説得力のある弁論には必要不可欠であるが、その際に出来合いの集成から借用するべきではなく、むしろ暗記を通じてそうした文章表現、知識を血肉化し、自在に記憶から出し入れできるようになるべきだとする⁽²⁰⁾。こうした同僚たちへの忠告にくわえて、彼は強まりゆく王権に対して、共和政的理想への回帰を説く。デモステネスやキケロの審議弁論を模範として、君主政のための雄弁ではなく、市民的な雄弁を再び取り戻すことを目指した。

だが、時代の流れに逆らうことは難しい。高等法院での審議により発出される勧告が強大になりゆく王権を制限し、宮廷内にも学識に結びついた雄弁が導入されることをデュ・ヴェールは理想としたが、現実には、とりわけアンリ四世以後、王と廷臣だけで重大事を決定する政治へと行きつく。

デュ・ヴェールの失敗の原因は君主政に移行しつつあるときに、共和政の模範であるデモステネスやキケロの雄弁を持ち出したことにあるだろう⁽²¹⁾。ミュレやモンテーニュ、そしてリプシウスが示唆したタキトゥス、そして後者二人が好んだセネカこそがむしろこの時代にふさわしい模範であり、聴衆の前で披露する雄弁ではなく、個人的な性格の強い書簡やそれにふさわしい文体が求められるのだ。

以上のような政治的变化に伴って、長く壮麗な文章による弁論は衰退し、その代わり「簡潔さ」の価値が徐々に称揚されるようになる。この文体的価値はコモンプレイスブックのような集成にまとめられた短文 *sententia* の利用によって正当化され、人々のあいだに浸透していく。

2. 「簡潔さ」の前景化

エラスムス：「豊かさ」のための簡潔さ

キケロによれば、簡潔さは叙述を曖昧にし、弁論において最も重要な資質である明晰さを損なうものだという⁽²²⁾。他方、クインティリアヌスは少ない言葉に多くの事柄、思想を凝縮するこ

(19) Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, op. cit., pp. 509-513.

(20) Guillaume Du Vair, *De l'Éloquence françoise*, édition critique précédée d'une étude sur le traité de Du Vair par René Radouant, Genève, Slatkine Reprints, 1970, pp. 136-137. ここでデュ・ヴェールは当時の高等法院官僚の一人、ブリソン Barnabé Brisson の演説が技巧や引用によって塗り固められており、論旨を辿るのに苦労すると批判し、続いてこうした傾向が一般的に見られるという。« Or ces défauts là n'ont pas nuy à luy seul, car la grande reputation qu'il avoit a faict aymer à ceux de son temps ce qu'il falloit fuyr en luy, et à son exemple faict passer quasi en tous ceux de nostre temps ceste vitieuse affectation de vouloir beaucoup alleguer et parler long temps. »

(21) Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, op. cit., pp. 521-524 ; 570, « L'idéal de l'éloquence civique cher à Du Vair, la tradition philosophique des Remonstrances chère aux Avocats généraux du Palais sont frappés d'impuissance et de ridicule. Muret et Lipse avaient vu juste dès le dernier tiers du XVI^e siècle : le régime politique moderne n'est pas la République, ni même la monarchie tempérée d'aristocratie, mais le Principat. »

とによって生み出される簡潔さは輝かしいものだという。また、文章が曖昧になるという危険性に注意を促しつつ、簡潔さとは語らなくてはならないものと十分とされるかぎりのものの中間、いわば中庸であると定義する⁽²²⁾。これは、倦むような装飾を排除し、最低限必要なことを述べるための方法である。ところで、クインティリアヌスにおいて簡潔さは豊かさの対立物ではない。もちろん文体の次元では、簡素な文体は修飾の豊富なそれと対照をなすものであるが、J. Chomarat が指摘するように⁽²⁴⁾、言論の能力あるいは資源としての豊かさ、つまり語彙、表現、知識のリソースの豊かさは簡潔さに対立することはない。むしろそうしたリソースは必要最低限の文章によって短く、適切に語ることを可能にする。

エラスムスもまた、『言葉と事柄の豊かさ』において、気取った文章に陥らないようにするための術として簡潔な表現を利用することを勧める。また、装飾や詞藻を凝らしたアジア風の冗長な文体に対立するアッティカ風の引き締まった文体に簡潔さの価値を結びつける⁽²⁵⁾。しかしエラスムスにおいて、重点はやはり豊かさ *copia* に置かれていることに注意しなければならない。ここで「ロキ・コムーネス」についての彼の説明を思い出そう。「したがって、十分な数の見出しを備え、それらを望む順に配列し、そこから一つ一つ下位区分に分け、その下位区分にロキ・コムーネス、すなわち格言風の短文 (*locos communes sive sententias*) を追加するとよい。(中略)それは寓話、物語、範例、新奇な事例でもよいし、格言風の短文や面白く人を驚かすような言葉、ことわざ、メタファー、たとえ話でもよい⁽²⁶⁾。」この場合、短文 *sententia* は簡潔さと関連しているのではなく、むしろそれらを積み重ねることによって豊かさを実現する。つまり、エラスムスは、短文 *sententia* の美的価値よりも、豊かさを生み出す手段、素材としての側面を評価している。

ミュレ：同時代のレトリックのインフルエンサー

エラスムスが「簡潔さ」に対して積極的な価値を与えていないのは、クインティリアヌスの理論に多くを負っているからである。帝政期の著者とはいえ、クインティリアヌスはやはりキケロの散文を手本とし、目標としている。したがって、そこで価値を持つのはやはりキケロ的完全文であり、表現の多彩さである。それと同様にエラスムスも言葉と事柄の「豊かさ」を強調し、『格

(22) Cicéron, *De l'orateur*, II, 326.

(23) Quintilien, *L'Institution oratoire*, IV, 2, 43-46.

(24) J. Chomarat, *op. cit.*, pp. 715-717. このリソース、つまり「蓄え」こそが、クインティリアヌス第十巻1章で述べられる「*copia*」にほかならず、これがエラスムスのレトリック思想の基礎をなしている。

(25) H. F. Fullenwider, « Erasmus, Lipsius and the *stilus laconicus* », in *Res Publica Litterarum*, vol. VII, 1984, pp. 61-65.

(26) Érasme, *De copia*, ASD I-6, pp. 260-261. また格言 *adagia*, 警句 *apophtegmatata*, 喩え *parabolae* などの短文の定義と区別については次の論文。Cl. Balavoine, « Bouquets de fleurs et colliers de perles : sur les recueils de formes brèves au XVI^e siècle », in *Les formes brèves de la prose et le discours discontinu (XVI^e XVII^e siècles)*, études réunies et présentées par Jean Lafond, Paris, J. Vrin, 1984, pp. 51-71.

言集』などの短文集成もそれらを実現するための手段の一つとして考えることができるだろう。ではいったい何が契機となって「簡潔さ」という文体的特徴に人々の目が向くようになるのか。それはレトリックの模範がキケロからタキトゥスやセネカというラテン白銀期の作家へと変わることによってである。すでに見たように、1580年代に入ってから雄弁の衰退を語り、共和政体の限界と帝政（君主政）への移行を示唆したミュレは、タキトゥスの文体のうちに次のような価値を認める。

所持品のなかで最も価値があるのは、金や宝石のようなサイズは小さいのに値段の高いものである。また、特に喜ばれる食物は少ない量で多くの風味をもたらすものである。それと同様に言論も、最も少ない言葉で多くの思想を含むようにすべきである。というのも、それは口先からではなく、心の底から生じるものだからだ (*ita maximi facienda oratio, quæ paucissimis verbis plurimum sententiæ amplectitur. Indicat enim, se in pectore, non in ore nasci*)⁽²⁷⁾。

少ない言葉で多くの事柄を表すという修辞技法としての「仄めかし」について言及しながら、ミュレはそこに「豊かさ」の凝縮したものとしての「簡潔さ」を見るだけでなく、それが発話者の心の発露だという価値づけも行なっている。また、彼が言うには、タキトゥスの文体には気取りや誇張がなく、多くの思想を含み、それでいて冗長にも大げさにもならず、ときには一語で一つの考えが表されているという。つまり問題とされているのは言葉の量ではなく、その質にはかならない⁽²⁸⁾。多くの思想が包含された簡潔な表現は、曖昧さを生み出すこともあるが、一般的で普通の話し方とは異なっているゆえに、威厳と品格を文体に与える。さらに、曖昧さは、その言葉を受け取る者にとっては注意を払うべきものとなり、すぐさま理解できるようなものではないがゆえに、不慣れな門外漢に対しては一種の幕のように機能する⁽²⁹⁾。このようにミュレは、「簡潔さ」、「仄めかし」といったそれまで「豊かさ」や「多彩さ」の陰に隠れていた価値に光を当てた。彼は本質的に伝統的価値を重んじるキケロ主義者であるが、それに縛られることなく時代の空気を読み、政治権力の移り変わりを注意深く観察し、それらにふさわしいレトリックのモデルを呈示したといえる⁽³⁰⁾。

(27) Muret, *éd. cit.*, “Oratio XIII”, p. 380-381.

(28) Cf. Mouchel, *op. cit.*, pp. 149-158ではサルスティウスの文体を題材に、アリストテレス以来の「簡潔さ」の定義を確認する。そこでは内容を明瞭に語ることのできる適切な長さという消極的な定義が与えられており、クインティリアヌスをはじめ、スカリゲル父までこの見解に沿っている。

(29) Muret, *éd. cit.*, Oratio XIV, p. 390, « [...] orationem a vulgari loquendi consuetudine abducens, ex ipsa peregrinitate dignitatem ei maiestatemque conciliat et attentionem legentium continet. Hoc quas velum est, quod profanis obtenditur. »

リプシウス：「教示 *docere*」のレトリック

リプシウスはタキトゥスのほかにセネカという模範を見つける。彼こそ簡潔な文体の体現者であり、リプシウスが拠りどころにするストア哲学の偉大な実践者である⁽³¹⁾。リプシウスにおいてセネカが文体やモラルにおける模範として第一位に上がる。たとえば短文 *sententia* について、キケロは短文では聴衆の心を動かしえないとして、重視しなかったが、リプシウスは、短文の鋭い表現は心に響くもののだとして、キケロの見解に対立する。口先ではなく、心から発せられた短文は、その熱意によって聴く者の心を打ち、精神を高揚させるのだ⁽³²⁾。この点において短文の「簡潔さ」はいまや完全文の「豊かさ」に取って代わる。また、「仄めかし」について、ミュレが指摘したように、タキトゥスにあってそれは豊かな思考が凝縮したものであるが、セネカにあっては、物事を明るみに出す力を意味する。

セネカの言葉はよく選び抜かれ、適切で、表現豊かであり、それどころか語っている以上の事柄を常に語る (*Verba selecta, propria, significantia, imo quae plus aliquid semper dicunt,*

-
- (30) Morris Croll, « Muret and the History of Attic Prose », in *Style, Rhetoric and Rhythm*, ed. J. Max Patrick et al., Princeton University Press, 1966, pp. 107-62はミュレのこうした態度を反キケロ主義と結びつける。たしかにミュレは白銀期の作家たちを再発見したとはいえるが、彼はやはりキケロの文体 *Tullianus stylus* に忠実である。Ch. Mouchel, « Les rhétoriques post-tridentines (1570-1600) : la fabrique d'une société chrétienne », in *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne*, éd. Marc Fumaroli, Paris, PUF, 1999, pp. 463-467. また J. J. Scaliger もキケロ以降、ミュレよりも良くラテン語を話すものはいないと言う。Cf. *Scaligerana sive excerpta ex ore Josephi Scaligeri per Fratres Puteanos*, Genevæ, per Petrum Columesum, 1666, p. 237, « Mureto nullus fuit post Ciceronem qui expeditius loqueretur [...] Lipsius nihil præ illo [...] ».
- (31) リプシウスにおけるストア哲学については、J. Lagrée, *Juste Lipse et la restauration du stoicisme. Étude et traduction des traités stoïciens De la Constance, Manuel de philosophie stoïcienne, Physique des stoïciens (extraits)*, Paris, J. Vrin, 1994 ; M. Morford, *Stoics and Neostoics. Rubens and the circle of Lipsius*, Princeton University Press, 1991. リプシウスの文体とセネカのその類似と差異については G. Williamson, *The Senecan Amble. Prose Form from Bacon to Collier*, The University of Chicago Press, 1951, en part.ch. 5, "Lipsius his Hopping Style", pp. 121-149. リプシウスがセネカを文献学的に校訂しながら、その哲学に影響されていったことについては J. Papy, « Erasmus' and Lipsius' Editions of Seneca: A "Complementary" Project ? », in *Erasmus of Rotterdam Society Yearbook (22)*, Brill, 2002, pp. 10-36 ; id., « Le sénéquisme dans la correspondance de Juste Lipse : Du *De Constantia* (1583-1584) à la *Epistolarum Selectarum Centuria Prima Miscellanea* (1586) », in *Journal de la Renaissance*, vol. VI, 2008, pp. 49-62.
- (32) Juste Lipse, *Manuductio ad Stoicam philosophiam*, Anvers, Plantin-Moretus, 1604, Lib. 1, diss. XVIII, p. 59, « *Tantus ubique vigor et calor est (ut de Tractatu nunc addam) ; sic omnia animata et spirantia ut excitari vel ignara et jacentia ingenia necesse sit, et tepida aut frigida calere. Imo non scripta legere, sed verba audire ; nec imaginem eius in libris sed ipsam hominem oculis sensibusque usurpare videamur.* » 「セネカは常に力強く、熱意があり（いまは論考のように話しているが）、彼の言葉のすべてに怠惰でだらしない精神の人間を奮い立たせずにはいられない、そして熱を失い冷たくなった精神を再び燃え立たせずにはいられない、そのようなエネルギーとインスピレーションがある。それどころか、その著作を読むというより、語っているのを聞く、また、文章のうちにそのイメージを見るというより、目や他の感覚で彼自身を把握するように思えるのだ」

quam dicunt.)。彼独自の才能だと思われるのが、言葉を切り詰めたなかに、驚くべき現働化の力があり (*in parcimonia verborum, mira énéργεια atque efficacia sit*)、簡潔さのなかに明瞭さと輝きがあることだ⁽³³⁾。

もはやここでは「曖昧さ」といった簡潔さに伴う欠点は問題とならない。仄めかしによって隠れた考え、事物が聴き手の前で明らかになるからだ。このようにして、心を打つ短文と仄めかしの効果は読者を「教える *docere*」ことへ向かう。それは記憶や心に残りやすい短文の形で表されたモラルや哲学の教えを、読者が理解し、実践するように促すことである。リブシウスは、曖昧さや仄めかしを、レトリックの問題ではなく、哲学の問題として取り上げる。それゆえ、聴衆を前にしたキケロの雄弁よりも、君主や友人に語りかけるセネカの哲学が重要となる。とはいえ、再度強調することになるが、リブシウスにおいてセネカが重視されるとしても、それはキケロを排除することではまったくない。むしろそれは単なる時代の変化にともなった価値観の変化にすぎないのだ。書簡ジャンルの再発見、君主政の強化、こうした要素がキケロではない新たなモデルを必要とし、それに適していたのがタキトゥスであり、セネカだったのだ。

このように十六世紀後半には、文体の特徴として「簡潔さ」が前景化し、それによる仄めかしは修辞技巧を越えて、哲学的勧奨の意味を帯びる⁽³⁴⁾。これは反キケロ主義者たちによって求められたレトリックの一つの到達点でありながら、実のところ、知恵が短文に凝縮され、なおかつ語り手の熱意を伝え、聴き手の心に響くという点で、キケロ主義者たちにとっても理想的なものである。つまり、「キケロ主義論争」の乗り越えがここで起きているのだ。

ところで、学校教育において進められてきた、古典作品の読書を通じて気に入った文章、モラルを学ぶのに適した範例などを抜粋し、書き留めておく「ロキ・コムーネス」の方法は1550年代に標準化する。それと同時期から、印刷された、いわば出来合いの引用句の集成、コモンプレイスブックも一般的になる⁽³⁵⁾。ここまで論じてきたレトリック、政治体制、そして価値観の変化とそれらの隆盛はどのように接点を持つだろうか。

(33) *Ibid.*, p. 57. また Mouchel, *op. cit.*, p. 412, note 93も参照のこと。

(34) ミュレは「仄めかし *emphasis/significatio*」を修辞技法としてのみ捉えているのに対し、リブシウスはそれに哲学的な意味を込めている (Mouchel, *op. cit.*, pp. 176-177)。また、この概念をリブシウスは1577年頃からすでに意識していたが、まだ単なる気取り程度の認識であった。しかし、タキトゥスやセネカを何度も読み返すことで、本格的に重視しはじめたのだという (*ibid.*, p. 437, note 262)。セネカ書簡のレトリック的側面についての分析は A. D. Leeman, *Orationis Ratio : The Stylistic Theories and Practice of The Roman Orators, Historians and Philosophers*, 2 vol, Amsterdam, Adolf M. Hakkert, 1963, pp. 260-283.

(35) この背景には、1560年以降にラテン語作品の出版が増加したことが挙げられる。Henri-Jean Martin, « Ce qu'on lisait à Paris au XVI^e siècle », in *BHR*, t. XXI, 1959, pp. 222-230. また、より詳細かつ定量的分析として次を参照。Id., « Classements et conjonctures », dans *Histoire de l'édition française. Le livre conquérant. Du Moyen Age au milieu du XVII^e siècle*, dir. H.-J. Martin et R. Chartier, Paris, Fayard, 1989, pp. 529-564.

3. 「センテンティア *sententia*」の時代

雄弁から書簡へ

簡潔であり、心に響く鋭さをもった短文を「センテンティア *sententia*」と呼ぶならば、エラスムスが認めたように、それは何世紀にもわたって人々の口の端にのぼってきたがゆえに、一種の承認された意見、論拠としての価値を持つ⁽³⁶⁾。十六世紀後半の弁論家たちは、こうした「センテンティア」の集成を利用して、論を組み立て、補強し、展開していた⁽³⁷⁾。権威、論拠としての役割以外に、短文は言論には優雅さや力強さを与えるのに役立つ。この美的価値は書簡においても有効である。

実際リプシウスは、優美さのために格言や諺といった仄めかしの効果がある精妙な表現を収集し、身に着けることを、『書簡教程』において推奨している⁽³⁸⁾。具体的には次の三つのノートが指示されている。「定型文 *formulae*」(配列、叙述、話題の転換などの作文構成に関わるものと、請願、感謝、称賛、非難などの表現)、「装飾 *ornamenta*」(これは見出し語にしたがって集める。比喩やアレゴリー、イメージ、「センテンティア」など)、そして最後に「語彙 *dictiones*」のノートである(これはフレーズと語の二つに分かれる。目立った表現、新奇な語や新しい使い方などを読書の際に見つけたら書き留めておく。フレーズの場合は著者別に分けるとよく、語はアルファベット順に並べるのがよい)。さらに書簡は即興で書かれる場合も多く、そのために話題や表現を一定数蓄積しておくことは有用なので、そうした目的のためのノートをつけることも指示されている⁽³⁹⁾。このように、印刷されたコモンプレイスブックからの引用はもちろんのこと、自ら作成した「ロキ・コムネス」のノートもまた、話題の増幅、文体の装飾に役立つのである⁽⁴⁰⁾。

君主教育の一環として

聴衆の感情を揺さぶり、説得へ導き、国事を決定するためには、言葉と事柄の「豊かさ」は必要不可欠であり、「センテンティア」はそうした完全文のあいだに突如として挿入されるがゆえに、

(36) Érasme, *Les Adages*, sous la direction de Jean-Christophe Saladin, Paris, Les Belles Lettres, 2013, “*Prolegomena*”, pp. 35-36.

(37) R. Radouant, *art. cit.*, p. 181.

(38) *Principles of Letter-Writing: A Bilingual Text of “Justi Lipsi Epistolica Institutio”*, ed. and trans. by Robert V. Young and M. Thomas Hester, Carbondale-Edwardsville, Southern Illinois University Press, 1996, cap. X, p. 32. (このエディションのテキストは *Epistolica Institutio, excepta e dictantis eius ore, anno M. D. LXXXVII, mense Iunio*, Leiden, Raphelengius, 1591に基づいている。)

(39) *Ibid.*, cap. XII, p. 42-45.

(40) たとえば語彙や表現の抜粋ノートとしてアンリ・ド・メーム一世の手稿 (BNF. Ms. lat. 8718, 8720) などがある。前者はキケロ書簡集からの抜粋を見出し語のもとに並べた、典型的な「ロキ・コムネス」のノートであり、後者はアブレウスから、気になる表現や語彙などを抜き出して並べたものである。

聴衆の注意を引きつけ、印象付ける効果がある。クインティリアヌスが巧みに表現したように、それはいわば「飛び道具」のように聴く者の心に刺さるのだ⁽⁴¹⁾。しかし十六世紀後半の政治の場で必要とされるのは、王に進言すること、よろこばせること、さらには優れた君主へと導いていくことである。感情を揺さぶること (*movere*) ではなく、機嫌を取り (*delectare*)、教え諭すこと (*docere*) へ弁論の目的が変化する。記憶に残りやすく、秀逸な表現を集めたコモンプレイスブックは君主を称える称賛弁論や諫言の演説に主題や表現を提供するだろう⁽⁴²⁾。また、過去の偉大な王侯や将軍たちの言行を集めた『警句集』は、君主のモラルを養うための手本にうってつけである⁽⁴³⁾。さらに、君主自身が軍事やモラルといった事柄についての集成を作成することは、その記憶力を強化し、それらの知識を血肉化するのを助けるだろう。この観点から、時間や手間の節約のためのロキ・コムーネス (見出し語) によるノート作成は、学生のみならず、君主にとっても有益な手段だといえる⁽⁴⁴⁾。

コモンプレイスブックの繁栄と衰退

「ある裁判長は私の面前で、判決文のなかに他からの引用を二百ばかり積み上げたことを自慢した⁽⁴⁵⁾」。モンテーニュの伝える事例はおそらくありふれたものだったのであろう。こうした「多くの人々が自分の勉強を倏約するために使うロキ・コムーネスの寄せ集め⁽⁴⁶⁾」こそ、デュ・ヴェールがその依存を批判した引用句の集成にほかならない。博識に基づいた発想を、華美な措辞よりも重視する高等法院の司法官たちにとって、この種の百科全書の知識の集成は、古代の知恵がまとめられた実用的なツールであった。他方で宮廷の人々や、聖職者たちも、古典や聖書、教父の著作といった権威ある書物からの引用文がトピック別に並べられているコモンプレイスブックを利用した。それほどまでに、この効率的で経済的なツールである引用の集成は、政治の

(41) *Inst. Orat.*, XII, 9, 3, « [...] illis vibrantibus concitatisque sententiis velut missilibus utetur. » こうしたイメージについては F. Delarue, *art. cit.*, pp. 108-109.

(42) 十七世紀前半、パリ高等法院院長であったアンリ・ド・メーム二世は称賛弁論や葬送演説に役立ちそうな引用文を「ロキ・コムーネス」のノートにまとめている (BNF. Ms. fr. 1015-1016)。また同年代のピエール・デュピュイも抜粋ノートのなかで、審議弁論に使えそうな部分に見出し語を付け、コメントを付している (Ms. Dupuy 900)。

(43) エラスムスは『警句集』の序文でこの側面を強調している。L. Lobbes, *Des Apophthegmes à la Polyanthée. Érasme et le genre des dits mémorables*, Paris, Honoré Champion, 2013, pp. 558-559. 君主教育と短文の関係については次。S. Édouard, *Les devoirs du prince. L'éducation princière à la Renaissance*, Paris, Classiques Garnier, 2014, pp. 105-113.

(44) F. Goyet, *Le Sublime de "lieu commun"*, Paris, H. Champion, 1996, pp. 638-642ではアミヨの「雄弁計画」におけるロキ・コムーネスの方法論の適用が論じられている。

(45) *Les Essais*, III. 12. 1103, « Un President se ventoit où j'estois, d'avoir amoncelé deux cens tant de lieux estrangers, en un sien arrest presidential »

(46) *Ibid.*, 1103, « Ces pastissages de lieux communs, dequoy tant de gents mesnagent leur estude [...] »

場のみならず信仰の場にまで浸透していた⁽⁴⁷⁾。

そこで用いられていたのは、ほとんどがギリシャ語もしくはラテン語、あるいはその両方のものであり、俗語のものは、それらの翻訳を除いてあまりなかった。『ストバイオス詞華集』や『プブリリウス・シュルス警句集』などの古代の集成や、ナニ・ミラベッリ『ボリアンテア』やアイランドのトマス『一掴みの花々』など中世の詞華集に索引などをくわえ、コモンプレイスブックとして流通させる一方、特定の著者に限定した抜粋集（エラスムスの『セネカの花々』、ラグネリウスのキケロからの引用集など）や、すでに集められた素材を再構成して、より大きなコモンプレイスブックしたものなど（ツヴィンガー『人生の劇場』、ヨーゼフ・ラングによる『格言集』など）、枚挙にいとまがない。

また、配列されている引用文も様々な箇所から抜粋され、元の文脈とは切り離されて集められているので、なんらかのヒエラルキーが引用文のあいだに存在するということはなく、むしろ誰の意見であれ、同列に扱われる⁽⁴⁸⁾。こうした特徴は、実のところ、1528年の『キケロ主義者』の論点と一致する。というのも、コモンプレイスブックは多くの優れた著者たちの文章を提供することで多様性と豊かさをもたらし、なおかつ引用文の価値の同等性は絶対的な模範の拒否として認めることができるからだ。もちろん引用文を収集、保管するプロセスは古代や中世から存在したが、その意義を強調したのは、やはりエラスムスであり、彼の教育に関する著作と『格言集』や『警句集』などの集成の出版は、こうしたコモンプレイスブックの隆盛を促進し、その利用がもはや当たり前風景になるまで、その地位を押し上げたのである⁽⁴⁹⁾。

ところで、ラテン語に対する国語意識の伸張にともなって、こうした類の集成も俗語で作成することが目指される。1570年代はまだラテン語のものを俗語に翻訳する形で、そのフォーマットも内容もそのままラテン語のものに負っていたが、1600年前後には見出し語も、抜粋文もすべて俗語によるものが作成されはじめる⁽⁵⁰⁾。こうしたラテン語への依存からの脱却が進み、自分た

(47) Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, op. cit., p. 466. またこの種の集成の一覧表は pp. 738-748を参照のこと。

(48) Ann Blair はとりわけ J. Bodin の例を引いてこの側面を強調している。« Bibliothèques portables : les recueils de lieux communs dans la Renaissance tardive », in *Le pouvoir des bibliothèques : La mémoire des livres en Occident*, sous la direction de Marc Baratin et Christian Jacob, Paris, Albin Michel, 1996, p. 92 sq, surtout p. 94, « [...] il me semble que la pratique du cahier de lieux communs encourage cette équivalence de faits d'origines différentes : une fois stockés, les faits ont tous la même valeur, quelle que soit leur source. »

(49) たとえばモンテーニュが所有していた集成については P. Villey, op. cit., t. 1, pp. 251-252を参照のこと。さらに、スカリゲルの息子たち（モンテーニュと同年代と少し下の年頃）が学習のための購入した書籍のリストのなかにも、キケロのコモンプレイスブックやテクストルの集成が見つかる。Vernon Hall Jr., « Life of Julius Caesar Scaliger (1484-1558) », in *Transactions of the American Philosophical Society*, vol. 40, n° 2, 1950, p. 138.

(50) フランス語のことわざをコモンプレイスブックにした Henri Estienne, *Les Premices ou le premier livre des Proverbes épigrammatisez ou des épigrammes proverbialisez*, Genève, 1594^g, こうした俗語のコモンプレイスブックの嚆矢とされる。また François des Rues, *Les Marguerites françaises* (1595, et Suite en 1612) も優れたフランス語表現をモラルに関する見出し語のもとにまとめた集成として人気を得た。

ちの文章がラテン語と比肩しうするという意識を持つようになると、いままでのコモンプレイスブックはもはや単なる素材を提供する書物としての価値しか持たなくなるだろう。そこに蓄えられた「センテティア」の数々は要するに他人の書いたものであり、借り物の知識でしかない。いまや重要なのは、著者自身が精妙で力強い文章を書くことである。引用文とみずからの文章を同化させ、競合させ、最終的には乗り越えなくてはならない。それゆえ引用文を自在に出し入れできる記憶力や博識よりも、機知に富んだ鋭いことを言う才能がもてはやされるようになる。事実、十七世紀後半には、権威ある引用文は鋭い箴言へとその座を譲り、コモンプレイスブックは百科全書や辞書などの特定のジャンルに限定された参照用書籍へと姿を変えるだろう⁽⁵¹⁾。

* * *

我々はここまで十六世紀後半に起きたレトリックと政治の変化を、1528年に発表されたエラスムスの『キケロ主義者』の射程と関連させつつ論じてきた。この時代のレトリックを考えるうえでエラスムスの存在を無視することができないように、政治体制について考えるのにリプシウスを抜きにすることはできない。むしろ、この後者がエラスムスの呈示した論点を書簡というジャンルや君主政の称揚という具体的な形へと現働化したのだといえよう。こうした時代の大きな流れと無縁でいられる人間など存在せず、多かれ少なかれその影響を受けるものだ。我々の主題であるモンテーニュもまた、彼の『エッセー』において多くの点でその影響を示している。したがって、我々は次に『エッセー』における十六世紀後半のレトリックの反映、とくに「簡潔さ」の問題について再考しなければならないだろう。

(51) A. Moss, « Du lieu commun à la maxime : de la Renaissance au monde classique », in *Formes littéraires brèves. Actes du colloque organisé par l'Université Blaise Pascal, en coopération avec l'Université Clermont-Ferrand, 29 novembre au 2 décembre 1989*, éd. J. Heistein et A. Montandon, Wrocław, Paris, A. G. Nizet, 1991, pp. 43-52, en part. pp. 46-49 ; *id.*, « Locationg Knowledge », in *Cognition and the Book : Typologies of Formal Organisation of Knowledge in the Printed Book of the Early Modern Period*, eds. Karl A. E. Enenkel and Wolfgang Neuber, Leiden, Brill, 2004, pp. 35-49, en part. pp. 47-48. また次も参照のこと。J. Lafond, « Les formes brèves de la prose et le discours discontinu (XVI^e-XVII^e siècles) », dans *Lire, vivre où mènent les mot*, Paris, H. Champion, 1999, pp. 299-326.